体験談⑩

『大阪第一次大空襲』

桐本　晨子（きりもと　あきこ）88歳

　昭和二十年三月十三日、戦時の緊張の中、明日は小学校の卒業式。子ども心に楽しみにしていた。その日の夜も空襲があるかもわからない。すぐに逃げられる服装をして床についた。

　夜九時頃、警戒警報のサイレンが鳴った。直様（すぐさま）、空襲警報のサイレンに変わり、今迄きいた事がない唸る様な響きが長く長く続いた。いつもと何かが違うと直感した。頭巾をかぶり防空壕に走った。一時間経っても警報は解除にならない。だんだん不安が募ってきた。二時間ぐらい経った頃、轟々（ごうごう）と物凄い上からの音。そして地上からの跳ね返りの地響き。壕の中で「今死ぬ今死ぬ」と隣の姉と固く固く手をつないでいた。壕の中では誰一人声を出さず九時間恐ろしい時間を過ごした。三月の壕の中は冷える。眠たい、喉が渇く、おなかが空いた、用を足したいの望みは一切思えなかった。編隊が頭上を通り過ぎると息を止めていた事に気付くのである。ホッとする間もなく、また編隊が頭上に飛んで来る。

　やっと朝六時、警報解除のサイレンが鳴った。

「助かった。」

　壕の戸を父が開けると真白な粘り気のある煙が壕の中に吸い込まれる様に入ってきた。庭の周りは煙でよく見えない。家が焼けていなかったのでホッとした。しかし庭越しの看護婦寮が焼けていた。外の空気はあらゆる物が焼けた匂いで喉が痛い、息が苦しい。足下は煙でよく見えない。よく見ると焼夷弾の外枠が落ちていた。恐ろしい思いをしながらも卒業式があればの想いが時々頭の中をか

すめる。少し落ちついた頃、親に告げず学校に行ってみた。誰一人いない。少し待ってみたが人が来ないので遠まわりして友達の家へ寄ったが門柱だけが立っていた。昼前に黒い雨が降り庭は黒くヌルヌルで歩けない。雨が止み、空を見ると全体が灰色、太陽が薄い桃色で裸眼でぼやけて見えた。これからどうなるのか暗然とした。

この第一次大空襲から八月十四日の第八次大空襲迄、五十数回の空襲があった。

暑い八月、壕の中はむせる。或る日、壕の中で聞いた事のない音が頭上から流れた。焼夷弾でなくまさか爆弾かもと思った。その音は金属性でヒュルヒュルという音だ。近くに落ちたらしくユッサユッサと壕が揺れた。近鉄南大阪線一つめの駅で線路が二本、二十米（m）くらい天を突いていた。近くの家は屋根が落ち家の中が見えた。また、阪和線の一つ目の駅で石垣が崩れていた。

三度目の爆弾は原子爆弾の模擬爆弾であった。見当つけて三キロ位を猛暑の中、見に行った。大きな大きな深い擂り鉢（すりばち）型の穴が空いていた。周囲の家は跡形もなく恐ろしい惨状であった。帰りはショックで足は重く喉はカラカラであった。